

2010年(平成22年)
11月15日 第161号
毎月3回 5・15・25日発行

高齢者住宅新聞

発行所 (株)高齢者住宅新聞社
本社 〒104-0061
東京都中央区銀座8-12-15
TEL 03-3543-6852(編集部)
http://koureisha-jutaku.com
発行人 西岡一紀
年間購読料 18,000円(税込み)

従来型特養でグループケア推進

かないばら苑



依田明子施設長

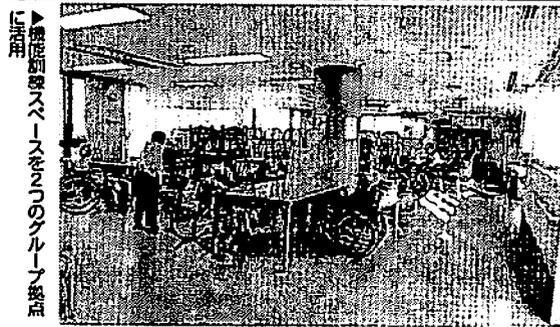
ハードは従来型
ソフトはユニット型

かないばら苑(神奈川県川崎市)は、5年前より入居者をグループに分けて、個別性の高いケアを行う「グループケア」を従来型特養で実践している。特養のユニット・個室化が進む中、施設改修や増築が困難で多床室でのケアを継続している特養が多いことも事実だ。その中で、10人〜20人ほどのグループに分けて質の高いケアを追求するかないばら苑の取り組みについて、依田明子施設長に話を聞いた。

「ステーションを解体し、スタッフが各グループの拠点に常駐していることで、一軒家にいるように入居者は居室からスタッフの気配を感じる事が出来ます。スタッフも一人の入居者に時間をかけて向き合えるので、日常の些細な変化に気づけたり、ケアに反映させるなどして入居者の不穏行動も減少しました」

「実践するグループケアとはどういうケアなのか。ハードは従来型、ソフトはユニット型。ハードは98床の従来型特養で、ショートステイは12床です。介護度によって9名から20名ずつグループケアの小集団に分けています」

「従来型を改修して新型にするのは工事費用の面で困難ですし、入居者の利用料も現状維持をしたい。しかし、入居者の生活の質を優先するためには個室・ユニット化が不可欠です。当ホームは必ずしも居室エリアで区切ってグループにするのではなく、介護度などその時に最適なグループ構成にするため、流動性があります。その点、閉鎖的にちがちなユニットケアの課題は解決し、スタッフの動きも可視化し、様々な課題がありますので、解消しながらグループケアのよさを伝えていきたいと考えています」



▲施設内スペースをつつグループケアに活用

入居者のQOL向上に寄与

「居室は多床室で、日中はフロア全員が同じダイニングに集まって行動する集団でのケアを長年行ってきました。認知症の方が増えたため介護職員の手が足りないほど対応に追われ、人員を増やす5年前にグループケアを導入しました。グループケアを導入したのによりスタッフからの強い要望がありました。しかし、増員せずにケアの質を高めることで課題解決を図ろうと始めたのが少数人数制ケアでした」

「介護度や認知症の度合い、入居者同士の相性などを考慮して思い切ったグループ分けをし、フロアにいくつもの集いの場を設けました。スタッフも担当制にし、グループ内では皆顔見知り、毎回同じ空間という安心の状況を作りました」

「導入後の変化は、まず施設内の雰囲気が変わりました。ヘルパ

<ホーム概要>

名称	かないばら苑
施設類型	特別養護老人ホーム
入居定員	98名
事業主体	一廣会
住所	神奈川県川崎市麻生区片平1430